

垂水南遺跡発掘調査報告書 I

— 垂水南遺跡第55次発掘調査 —

平成 20(2008)年 3月

吹田市教育委員会

序

垂水南遺跡は、弥生時代から中世にかけての集落遺跡です。遺跡の存在は、昭和41（1966）年、土地区画整理事業に際して発見されて知られるところとなり、これまでに58次にわたる発掘調査等を行い、吹田市内でもっと多くの調査を実施してきた遺跡です。

垂水南遺跡は、大阪市営地下鉄御堂筋線江坂駅の東側に位置しています。この一帯は、かつて水田が広がっていましたが、土地区画整理後は、オフィス機能が集中するようになり、事務所ビルが建ち並び、大阪市内方面への交通の利便性から、共同住宅も多く建設されるようになりました。そして、これらの開発工事に伴って発掘調査も多く実施してきたわけです。

本書で報告する第55次発掘調査も共同住宅の建設に伴って実施したものです。調査中は、近隣の住民や勤められている方々には、このような市街地に遺跡があるのかと意外に思われた方々も多かったようです。本市では、発掘調査の現地説明会や遺跡説明板の設置などにより、市民の皆様に吹田市内の遺跡を知ってもらうことに努めているところですが、本書もその一役となればと考えています。

平成20(2008)年3月

吹田市教育委員会

教育長 田口省一

例　　言

1. 本書は、平成9（1997）年度に実施した、吹田市垂水町3丁目954-12、13、14における垂水南遺跡第55次発掘調査の成果をまとめたものである。
2. 発掘調査は、吹田市立博物館文化財保護係賀納章雄が担当した。整理作業については、吹田市岸部北4丁目10番1号、吹田市立博物館内資料整理室において実施し、資料の保管も同所において行っている。
3. 本文の執筆は、賀納が行った。
4. 図中の方位は磁北を示し、標高はT.P（東京湾標準潮位）を示す。
5. 遺物実測図の縮尺は、土器類を1/4、石製品を3/4とした。
6. 発掘調査においては、建築事業者である株式会社ベルデジャパンから多大な協力を得た。
記して感謝致します。
7. 発掘調査および整理作業には以下の方々の参加を得た。
(発掘調査)
小田尚幸、玉井義也、丹羽まどか、野口佳子、水江美保
(整理作業)
花崎晶子、佐藤健太郎、秋山芳恵、小川里美、木松安紀子、高井明美、林裕子

目 次

I. 位置と環境	1
II. 調査の経過	3
III. 調査の成果	3
(1) 基本土層序	3
(2) 遺構	4
(3) 遺物	10
IV. まとめ	16
遺物観察表	19

挿 図 目 次

第1図 垂水南遺跡及び周辺主要遺跡分布図	1
第2図 垂水南遺跡第55次発掘調査地周辺図	2
第3図 調査区配置図	3
第4図 調査区土層断面模式図	3
第5図 遺構平面図	5・6
第6図 落ち込み1セクションベルト断面図	7
第7図 落ち込み2セクションベルト断面図	7
第8図 SD1セクションベルト断面図	8
第9図 SD5西側セクションベルト断面図	8
第10図 SD6セクションベルト断面図	8
第11図 SK5・SK6埋土断面図	9
第12図 落ち込み1出土遺物実測図①	11
第13図 落ち込み1出土遺物実測図②	12
第14図 落ち込み1出土遺物実測図③	12
第15図 落ち込み2出土遺物実測図	13
第16図 土坑出土遺物実測図	14
第17図 溝出土遺物実測図	15
第18図 その他遺物実測図	15
第19図 第4次・第51次・第55次調査遺構図	16
第20図 垂水南遺跡占墳時代遺構面標高図	18

報告書抄録

ふりがな	たるみみなみいせきはつくつちょうさほうこくしょⅠ
書名	垂水南遺跡発掘調査報告書Ⅰ
副書名	垂水南遺跡第55次発掘調査
卷次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編集者名	賀納章雄
編集機関	吹田市教育委員会
所在地	〒564-0041 大阪府吹田市泉町1丁目3番40号 TEL(06)6384-1231
発行年月日	西暦 2008年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村 調査番号	北 緯 ° ′ ″	東 経 ° ′ ″	調査期間	調査 面積	調査 原因
たるみみなみいせき 垂水南遺跡	すいとうしきらみちこう ちくみの 吹田市垂水町3丁目 954-12、13、14	27205	88 34° 45' 43"	135° 30' 14"	19970818～ 19970919	200	共同住宅 の建築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
垂水南遺跡	集落遺跡	古墳時代	ピット、土坑、溝、 落ち込み	弥生土器、土師器、 須恵器、製塙土器、 勾玉、白玉	竪穴式建物 跡の可能性 が考えられ る大型土坑

I. 位置と環境

垂水南遺跡は、吹田市垂水町3丁目・江坂町1丁目一帯に広がる集落遺跡である。垂水南遺跡が所在する地点は、主に神崎川や糸田川などの河川の沖積作用により形成された神崎川低地といわれる平野部にあり、その現標高は約2~3mと低い。もともと、この一帯の地盤は軟弱で地下水位も高く、昭和40年代に区画整理が行われるより以前は、湿田が広がっていた。

これまでの垂水南遺跡における発掘調査では、弥生時代から中世にかけての遺構や遺物が確認されているが、中でも古墳時代と平安時代に良好な資料が得られている。

弥生時代では、これまでのところ明確な遺構は検出されておらず、遺物のみが認められている状況であるが、第58次調査では古墳時代の河道跡からではあるが、古墳時代の遺物とともに残存状況の良好な弥生中期から後期にかけての弥生土器が多数出土している。

古墳時代では、古墳時代全般にわたっての遺物が検出されているが、とくに布留式期を中心とする古墳時代前期の遺物が多く認められており、それとともに竪穴式建物跡、掘立柱建物跡、水田跡、畦畔跡、河道跡などの遺構が検出されている。また、ここでは、滑石製の勾玉や白玉などとともに、その未製品が数多く出土しており、当地には滑石製品作りの工房があったものと考えられている。さらに、鉱滓やフイゴ羽口、砥石など鍛冶に関連するとみられる資料も多く出土しており、製鉄関連の施設があった可能性も考えられている。

ところで、これまでの垂水南遺跡での発掘調査や立会などでは、弥生~古墳時代に相当する土層において葦などの湿地性のものと思われる植物遺体が確認される地点が多くあり、当時、この一帯は湿地の様相をもっていたと考えられる。そして、湿地の様相の中にはやや地盤の高い箇所が点在し、そのような地点において古墳時代の建物跡などが確認されており、微高地が



第1図 垂水南遺跡及び周辺主要遺跡分布図（1：30,000）

居住域となっていたようである。

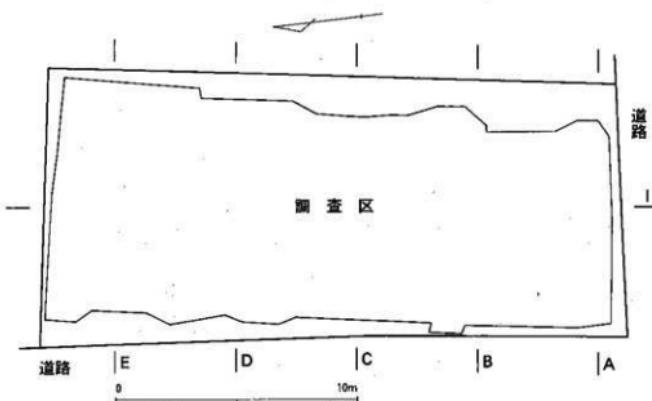
奈良時代では、それほど多くの資料は得られていないが、護岸の痕跡が残る河遺跡などとともに、土師器や須恵器、そして瓦などが検出されており、寺院が存在した可能性も考えられている。

平安時代では、ピットや杭列、溝などが検出されており、遺物としては、土師器や須恵器、黒色土器などのほか、綠釉陶器、皇朝十二銭の1つである隆平水寶、そして注目すべきは、平安初期の遺物として「垂庄」、「中庄」などと書かれた墨書き土器が出土している。垂水南遺跡の西方一帯には、平安初期に成立した垂水庄という莊園が広がり、この墨書き土器は、成立当初の垂水庄との関連が考えられる貴重な資料となっている。また、平安宮造営当初に瓦を供給した吉志部瓦窯跡の瓦も垂水南遺跡で出土しており、ここに中央政権と何らかの関係をもつ施設等が存在した可能性も推測される。

中世では、当地一帯は、主に耕作地として利用されたようであり、これまでに小畦畔、小溝などが検出されている。そして、それらの多くは、ほぼ東西・南北の方向を示しており、垂水南遺跡が所在する豊島郡の条里地割の方位と概ね合うものとなっている。



第2図 垂水南遺跡第55次発掘調査地周辺図 (1:5,000)



第3図 調査区配置図

II. 調査の経過

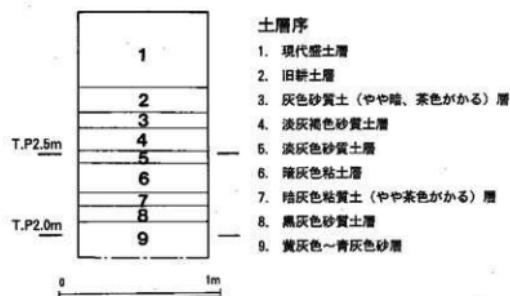
今回の発掘調査は、垂水南遺跡の包蔵地内にある当調査地において、共同住宅の建築工事が予定されたことから、平成9（1997）年3月21日に確認調査を実施したところ、古墳時代の遺構・遺物の包蔵が確認された。その結果を受けて建築事業者と協議を行い、遺跡が破壊される判断された建築予定箇所について調査区（約200m²）を設けて、平成9年8月18日から9月19日にかけて発掘調査を実施した。

調査にあたっては、掘削土の置き場の確保から、調査区を北半と南半に分けて、最初に北半部の調査を行い、北半部を埋め戻した後に南半部の調査を実施した。

III. 調査の成果

（1）基本土層序

調査区内の土層序は、現代盛土層・旧耕土層（第1層）・灰色系の砂質土層（第3～5層）、暗灰色粘土層（第6層）、やや茶色がかる暗灰色粘土層（第7層）、黑色粘土層（第8層）、黃灰色～青灰色砂層（第9層）である。



第4図 調査区土層断面模式図

灰色砂質土層（第8層）、黄灰色～青灰色砂層（第9層）の堆積が基本的に認められた。このうち黒灰色砂質土層で古墳時代の遺物の包含が確認され、その下位層の黄灰色～青灰色砂層上面において遺構が検出された。

（2）遺構

遺構面は概ねT.P 1.9～2.05mの標高を測り、検出された遺構は、ピット、上坑、溝、落ち込みなどがあった。溝や落ち込みなどをみると、それらは全般的にN 49°～57° E の方位を示すものであった。以下、主な遺構についてみておく。

[落ち込み]

落ち込みが、調査区の北西隅と南東隅において2か所検出された。調査区北西隅で検出された落ち込み1は、検出部分で約68cmの深さで北西側に落ち込むのが確認された。落ち込み肩の方位は概ねN 49° E を示していた。落ち込み1の埋土は、黒灰色の砂質土・砂を主体とするものであったが、間に腐植土からなる土層が挟まり、この落ち込み1の埋没過程においては湿地的な様相をもっていたものと考えられる。ただし、落ち込み内では、平面形としてくの字状に折れる形で緩やかな段をもち、さらに、落ち込み肩から30～50cmほど内側にその際に沿ってのびる溝SD 2が検出された。SD 2は、幅20～40cm、深さ4～13cmを測ったが、さらに、SD 2に重複してピットが3基検出された。このことから、落ち込み1は、まったくの自然地形であるとは考えにくく、人為的な掘削によるものか、もしくは自然の落ち込み地形に護岸や土留めなどの人為的な手が加えられたものではないかと考えられる。

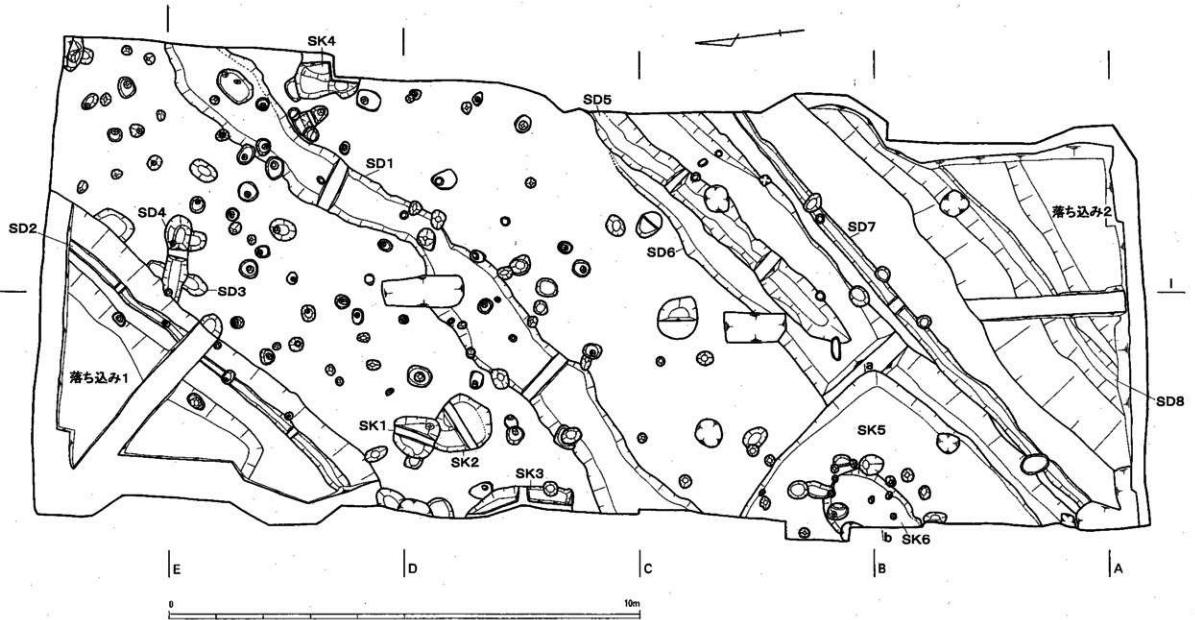
調査区南東隅で検出された落ち込み2は、検出部分で約92cmの深さで南東側に落ち込んでいた。その落ち込み肩の方位は概ねN 57° E を示し、その埋土は、黒灰色砂質土を主体とするものであった。そして、ここでもその落ち込み肩に沿う形で溝SD 8が認められた。SD 8は、落ち込み2の肩際から50～110cmほど内側でのび、溝の肩は落ち込みの傾斜に沿って上位側と下位側で30cm程度の高低差があり、落ち込み内の溝状の段ともいえるものであった。幅は60～70cm、深さは下位側の肩からで5～13cmを測った。この落ち込み2についても、SD 8の状況から何らかの人為的な手が加わっているものと考えられる。

[溝]

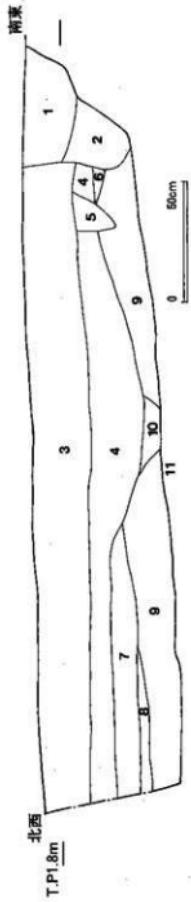
上述のSD 2・SD 8のほかに6条の溝が検出された。これらの溝は、SD 3・SD 4を除いて、その方位がSD 2・SD 8と同じく概ねN 50° E 前後をもってのびるものであった。

SD 1は、概ねN 52° E の方位をもってのび、幅90～160cm、深さ18～27cmを測った。その埋土は、黒灰色砂質土及び淡黒灰色砂質土、青灰色粘土を主体とするものであった。

SD 5は、SD 6に重複する形で検出され、幅50～70cm、深さ約23cmを測った。その方位は概ねN 51° E を示していた。また埋土については、暗青灰色砂質土と暗黃灰色砂質土を主体とするものであった。

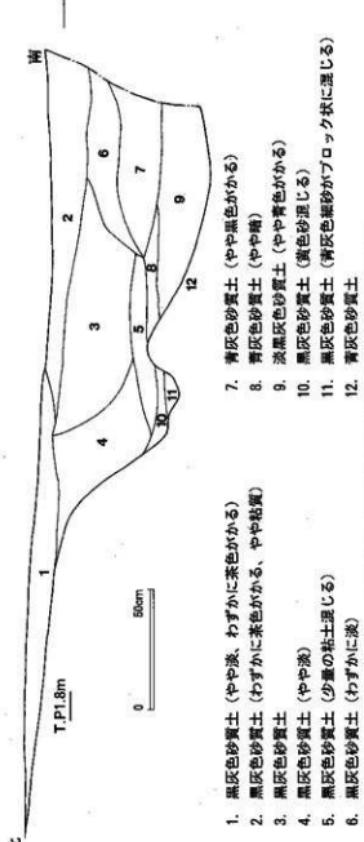


第5図 遺構平面図



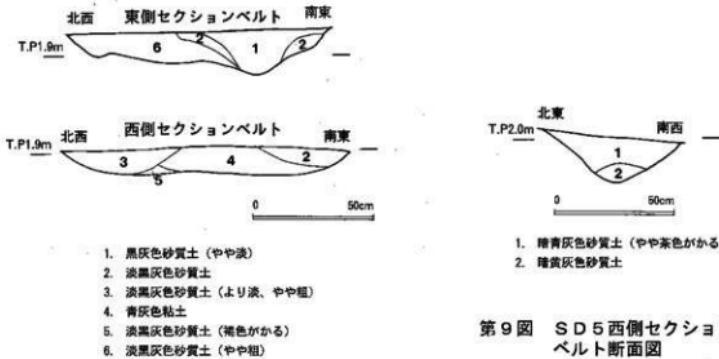
第6図 落ち込み1セクションベルト断面図

1. 黒灰色砂質土 (やや淡、灰褐色土に混じる)
2. 黑灰色砂質土
3. 淡黒灰色砂質土
4. 淡黒灰色砂質土 (硬質)
5. 淡黒灰色砂質土 (より硬)
6. 淡黒灰色砂質土 (より硬)
7. 黑褐色土 (腐植土)
8. 黑褐色土 (腐植土) に
黒灰色砂と暗黃褐色砂の混合層が混じる
9. 黑灰色砂と暗黃褐色砂の混合層
10. 黑褐色土に黒灰色砂質土混じる
11. 暗黃褐色砂 (1cm程度の様子を多く含む)



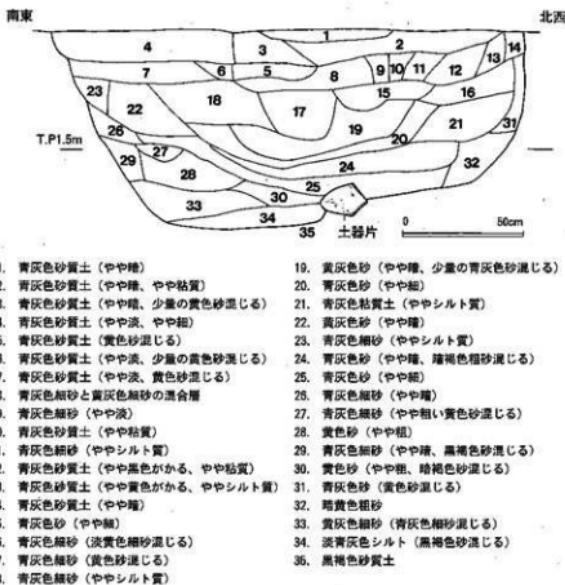
第7図 落ち込み2セクションベルト断面図

1. 黑灰色砂質土 (やや淡、わずかに茶色がかる)
2. 黑灰色砂質土 (わずかに茶色がかる、やや粘質)
3. 黑灰色砂質土
4. 黑灰色砂質土 (やや淡)
5. 黑灰色砂質土 (少量の粘土混じる)
6. 黑灰色砂質土 (わずかに淡)
7. 黑灰色砂質土 (やや黑色がかる)
8. 黑灰色砂質土 (やや暗)
9. 淡黑灰色砂質土 (やや青色がかる)
10. 黑灰色砂質土 (青色砂混じる)
11. 黑灰色砂質土 (青色砂細砂がブロック状に混じる)
12. 黑灰色砂質土



第9図 SD 5 西側セクションベルト断面図

第8図 SD 1 セクションベルト断面図



第10図 SD 6 セクションベルト断面図

SD 6は、概ねN54° Eの方位をもってのび、幅210~230cm、深さ約80cmを測った。その埋土については、青灰色の砂・砂質土を主体とするものであった。

SD 7は、N55° Eの方位

をもってのび、幅15~45cm、深さ1~7cmを測った。

さて、落ち込み1に重複される形で検出されたSD 3とSD 4については、他の溝と方位が異なり、またその長さも短いものであった。SD 3は、概ねN32° Eを示し、検出部分で長さ1.4m以上、深さ約24cmを測った。SD 4は、概ねN76° Wの方位をもってのび、検出部分で長さ1.7m以上、深さ約30cmを測った。

[土坑]

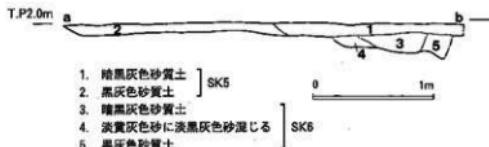
いくつかの土坑が検出されたが、調査区西側では検出部分で平面形がくの字状に屈曲する大型の土坑SK 5が検出された。全形は明らかでないが、おそらく方形の平面形をもつ土坑ではないかと考えられる。検出部分でその一辺4.3~4.7m以上を測り、一辺の方位は、N50° EもしくはN40° Wを示し、上述の落ち込みや溝の多くとほぼ同じ方位をもっていた。その深さは10cm程度を測り、埋土は黒灰色~暗黒灰色の砂質土が認められた。そして、SK 5内ではピット、土坑が検出された。SK 5内で認められた土坑SK 6は、検出部で長さ1.3m以上、深さは約10cmを測った。また、ピットについては柱痕のあるものは認められなかったが、大小19基のピットが検出された。この大型土坑SK 5の全形は明らかでないが、検出部分において大型土坑内の中央付近に土坑SK 6があり、その周囲にピットがあるという状況から、堅穴式建物跡である可能性が高いものと考えられる。

この他の土坑では、SK 1がSK 2に重複して検出された。SK 1は、90~100cmの径をもつやいやいびつな三角状の平面形を呈する。その深さは約15cmを測った。また、SK 2については、検出部分で長径約140cm、短径約120cmのやいやいびつな卵形を呈し、その深さは約35cmを測った。

SK 3とSK 4については、調査区の壁にかかる形で全形は明らかでないが、SK 3は、検出部分で長さ230cm以上、深さ約27cmを測り、SK 4は、検出部分で長さ130cm以上、深さ約19cmを測った。

[ピット]

多数のピットが検出された。特に落ち込み1とSD 6との間に挟まれた範囲において多くのピットが検出された。の中には柱痕が認められるものが多くあり、ある方向性をもって並ぶピットもいくつか認められた。しかし、そうしたピットの並びの中ではピット間の距離やピッ



第11図 SK 5・SK 6 埋土断面図

トの対応関係にずれがあり、明確に建物跡等として断定し復元できるものはなかった。ただし、柱痕をもち、しっかりと掘り込まれているピットが多数あり、この付近に建物跡等が存在したことは間違いないであろうと考えられる。

(3) 遺物

今回の発掘調査では、主に弥生時代後期～古墳時代中期の遺物が検出されたが、その中心となるのは古墳時代前期のものであった。以下、図化した遺物についてまとめる。

[落ち込み 1]

1～3は土師器壺である。1は布留式甕で、体部外面のハケ調整は難であり、縦方向と横方向のハケ調整の順序に統一性がみられない。2は口縁部がハケ調整により、端部は整わず歪んだ状態となっている。3は体部外面を板ナデ、内面をナデ調整するものであり、口縁端部は若干外反する。

4～19は土師器壺である。4は広がる口縁部をもつものである。外面は板ナデされているが、口縁部は板ナデ後に横ナデされている。5はやや外反気味に開く口縁部をもち、体部外面はハケ調整後にナデ調整されている。その器壁は厚い。6は口頸部のみ残存するものであるが、口縁端部付近がやや受口状に開くものである。

7は、壺の口縁部である。口縁部が体部から直線的に立ち上がり、頸部に凸帯を貼りつけ巡らされている。他所からの搬入品であろうか。

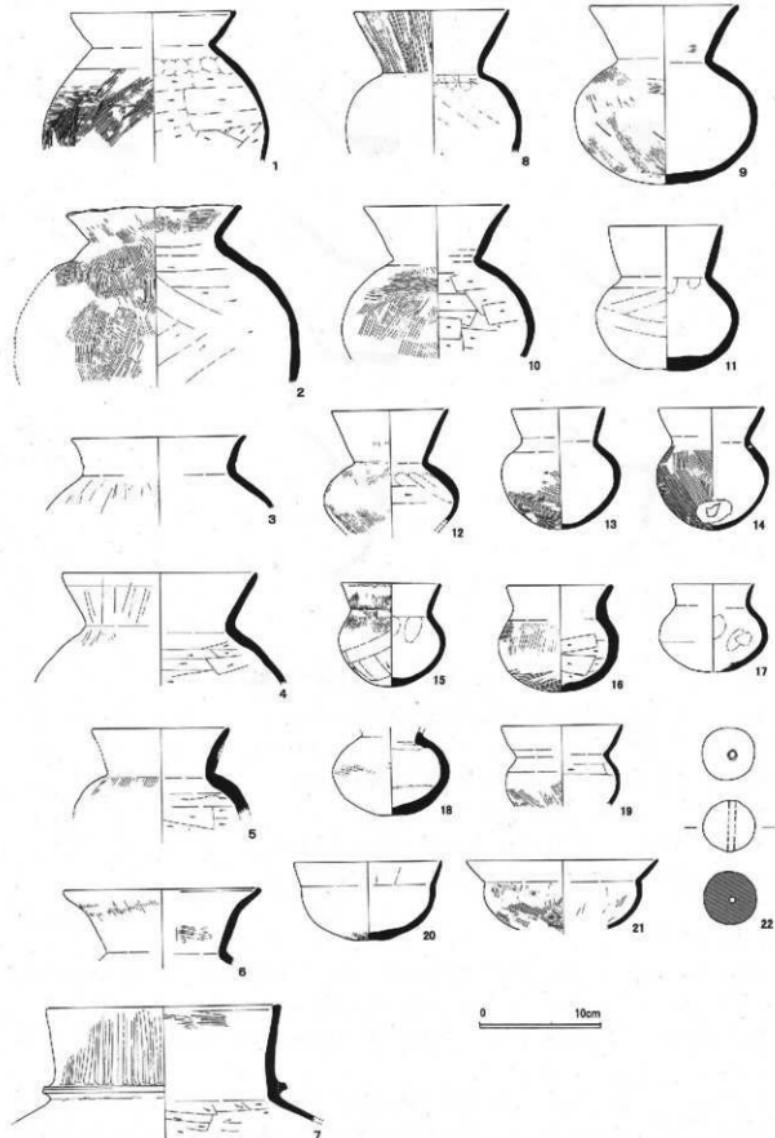
8～12はやや偏平気味の球形の体部に直線的に開く口縁部をもつものである。これらは体部外面をハケ調整もしくはナデ調整されているが、口縁部については8でヘラミガキが施されている以外、他は横ナデ調整となる（9・12はハケ調整後横ナデ）。

13～19は小型丸底壺である。すべて体部外面はハケ調整もしくはナデ・板ナデ調整されているが、15の体部下半はケズリとなる。18は口縁部が欠損しているためにわからないが、他の小型丸底壺の口縁部は横ナデ調整されている（15はハケ調整後横ナデ）。また、19については、他のものに比べて器壁が薄く、口縁部もやや内湾気味に開く。

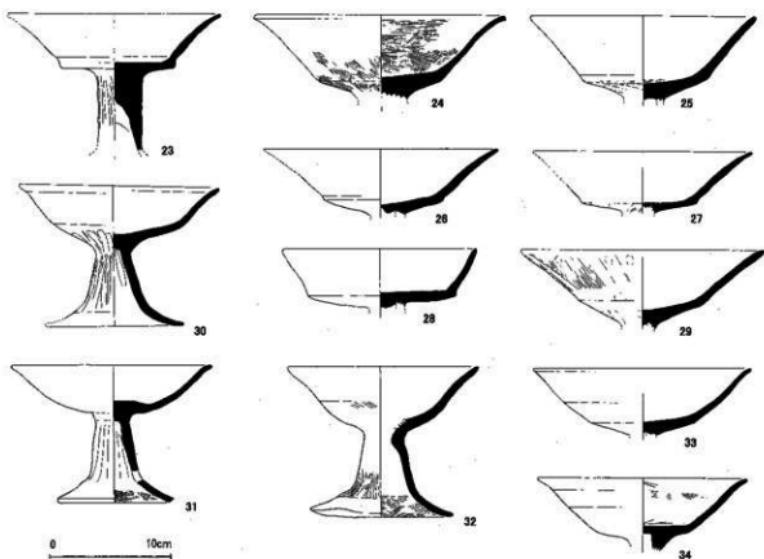
20・21は土師器の小型鉢である。これらも小型丸底壺と同様、口縁部は横ナデ、体部はハケ調整もしくはナデ・板ナデ調整されている。

22は球状に丸められたものの中央に孔があけられた土製品である。その用途は不明であるが、土玉といえるであろう。

23～34は土師器高杯である。23～29は杯部に屈曲部が認められるものである。23・28はほぼ平坦な底部に口縁部がつくものであるが、23の口縁部は外反気味に開き、28は短く立ち上がる口縁部がつく。また、他のものは外反気味に開く口縁部をもつ。23の脚部にはヘラナデが認められるものの、ヘラミガキなどの精緻な調整を施されているものはない。30～34は杯部に明確な屈曲部をもたず、緩やかに口縁部が開くものである。杯部から脚部までの全体形がわかるも



第12図 落ち込み1出土遺物実測図①



第13図 落ち込み1出土遺物実測図②

のとしては30~32がある。30・31には脚部にヘラナデがみられるが、他はハケ調整やナデ調整などによっており、ヘラミガキが施されているものはない。31の脚裾部内面には布目痕が認められる。また、32の杯部は他のものよりもやや深めとなる。

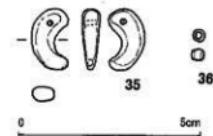
35は石製の勾玉であり、長さ約1.7cm、厚さ0.28~0.48cmを測る。36は石製の白玉であり、径約0.4cm、厚さ約0.3cmを測る。

[落ち込み2]

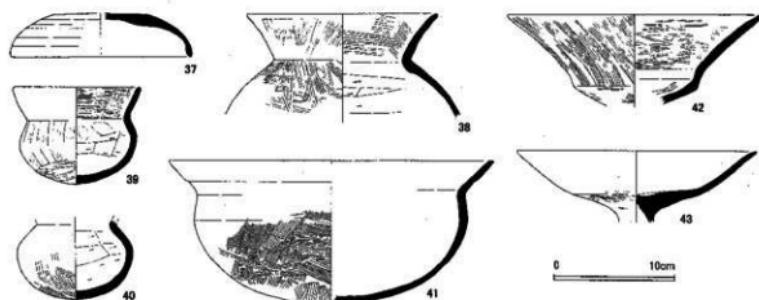
37は須恵器杯蓋である。天井部外面は回転ヘラケズリ、天井部内面はナデ、他は回転ナデにより調整されている。穂はまったく退化して認められず、口縁端部に段等は認められない。

38は土師器壺である。外側へ広がる口縁部をもち、体部内面はヘラケズリされ、他はハケ調整されている。

39・40は小型丸底壺である。39は口縁部内面・体部外面が板ナデ調整され、体部内面はヘラケズリおよびナデ調整されている。40は口縁部が欠損しているが、体部外面はハケ調整、体部内面はヘラケズリされている。



第14図 落ち込み1
出土遺物実測図③



第15図 落ち込み2出土遺物実測図

41は土師器鉢である。口縁部は横ナデされ、外側へ開く。体部外面はハケ調整、体部内面はナデ調整されている。

42・43は土師器高杯である。42は杯底部と口縁部との間に明確な屈曲部をもち、口縁部は外反して開く。残存部において内外面ともヘラミガキが施されている。43は杯部口縁部が大きく外側へ開くものである。口縁部は横ナデ、杯底部外面はハケ調整後ナデ、杯底部内面はナデ調整されている。

[SK 1]

44・45は土師器高杯である。2点とも杯底部から明確な屈曲部がなく緩やかに開く口縁部をもつ。44は杯部外面をハケ調整の後ナデ調整している。45は杯部内面を板ナデ、杯部外面はナデ調整されている。

[SK 4]

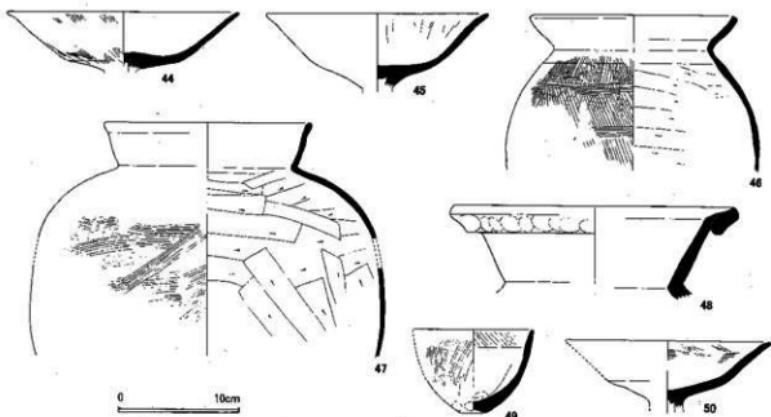
46は土師器壺である。口縁端部は端面をもつように肥厚する。体部外面のハケ調整は粗めであり、その器壁はやや厚い。

[SK 5]

47は土師器壺である。残存部分において肩部がやや張るプロポーションをもち、口縁端部は丸みをもって若干肥厚する。体部外面のハケ調整は粗い。

48は土師器壺の口縁部である。口縁端部を外側に大きく折り返して肥厚させている。肥厚させた口縁端部外面には指オサエの痕跡が残る。

49は土師器の小型鉢である。底部付近は指オサエされ、他は内外面とも板ナデ調整されている。底部は小さな平底でくぼんでいる。



44・45: SK1、46: SK4、47~50: SK5

第16図 土坑出土遺物実測図

50は土師器高杯である。杯部は明確な屈曲部をもたず、内面はハケ調整され、口縁部が緩やかに外側に開く。

[SD 1]

51~53は弥生土器壺である。いずれも体部外面はタタキ調整され、体部内面は51がナデ調整、52・53が板ナデ調整されている。

54は土師器高杯である。杯部は屈曲部をもたずに開くもので、口縁部は横ナデされ、他はナデ調整されている。

[SD 3]

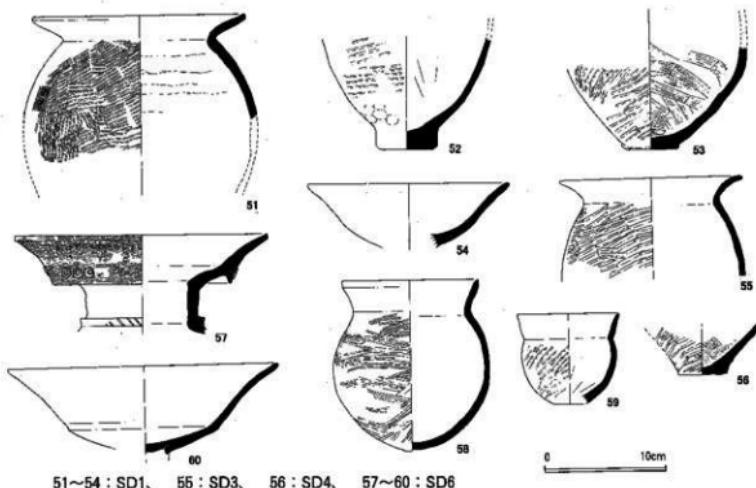
55は弥生土器壺である。体部外面はタタキ調整、体部内面はナデ調整されている。

[SD 4]

56は弥生土器壺の底部である。残存部で外面はタタキ調整、内面は板ナデ調整されている。

[SD 6]

57は土師器壺の口頸部である。口縁部外面は波状文と円形浮文により加飾されている。また頸部と体部の接合部には凸帯がめぐらされ、凸帯に刺突文が施されている。

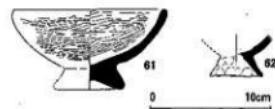


第17図 溝出土遺物実測図

58は土師器壺である。体部外面はタタキ調整後にヘラミガキが施され、体部内面はナデ調整されている。

59は弥生土器の小型鉢である。体部外面はタタキ調整、体部内面は板ナデ調整されている。

60は土師器高杯である。口縁部が底部から緩やかに屈曲して外反して開く。調整については全体的に摩滅のため不明瞭であるが、底部内外面はナデ調整が認められる。



第18図 その他遺物実測図

[遺物包含層]

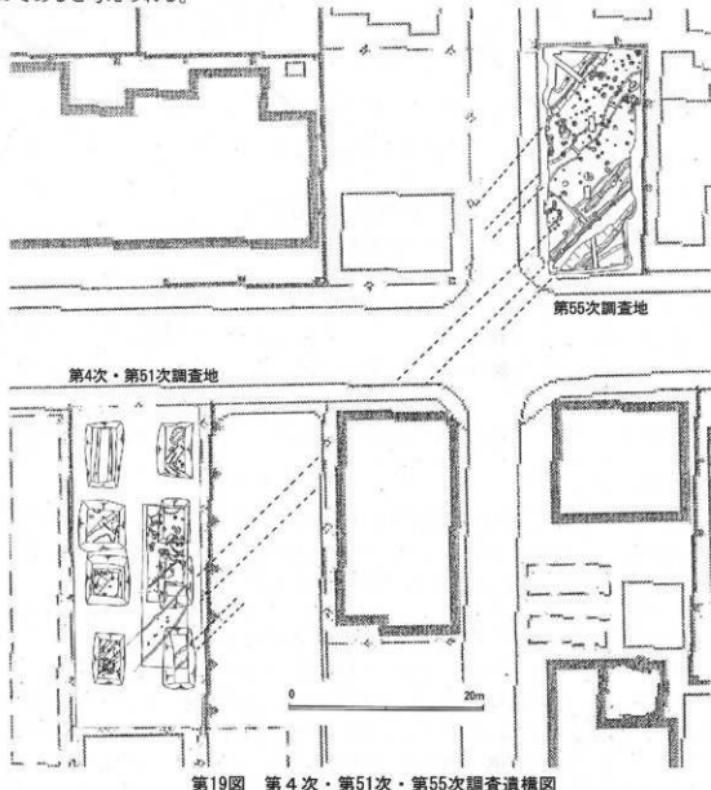
61は土師器台付鉢である。楕状の鉢部に低い台がつく。鉢部は内外面ともヘラミガキが密に施され、台部はナデ調整されている。器壁はやや厚いものとなっている。

62は製塙土器であるが、脚台のつく底部のみが残存する。

以上、図化した遺物についてまとめた。本調査での遺物の主体は古墳時代前期のものであるが、ここで紹介した溝SD3・SD4からの出土遺物については弥生土器ばかりであった。しかし、各溝内からは図化できなかったが、布留式期のものとみられる土師器片が検出されている。また、各遺構においては、弥生土器片や須恵器片を含むものもみられるが、須恵器片については、37のように古墳時代中・後期のものが若干数含まれる程度であり、おそらく上位層からの混入であると考えられる。

IV. まとめ

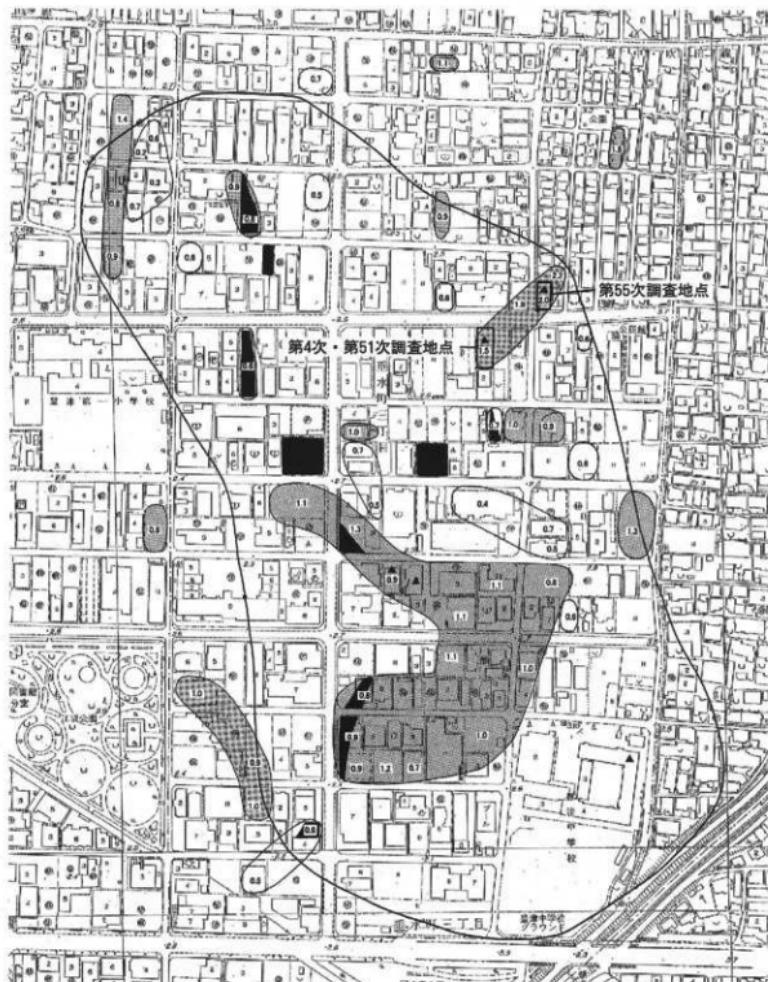
以上、主な遺構・遺物についてまとめた。ここでは、調査区の北西側と南東側に落ち込みがあり、その間に竪穴式建物跡とみられる大型土坑と柱痕をもつ多数のピットが検出された。このことから、当調査地においては、2つの落ち込みの間に挟まれた微高地上に人々の居住区があったものと考えられる。また、重複関係から建物跡が存在した時点では、SD1やSD6などの溝は埋没していたものと考えられる。そして、出土遺物をみると、古墳時代中・後期の須恵器片を若干含むが、その主体は布留式期の土器器を中心とするものであり、中でも布留式新相を示すものであった。このことから、今回検出された遺構の時期は概ね古墳時代前期後葉のものであると考えられる。



さて、ここで注目されるのは、溝や落ち込みなど遺構の多くが概ねN50°E前後の方位を示していた点である。垂水南遺跡では、これまでの発掘調査で検出された古墳時代の河道跡や自然流路などにおいて、北東から南西にかけてのびる方向性と北西から南東にかけての方向性が認められているが、第55次調査地付近では主に北東方向からの方向性が確認されている。この方向性は、当調査地付近の地形的条件によるものと考えられ、当調査地近辺での発掘調査においても、これとほぼ同じ方位をもつ溝や落ち込みなどが検出されている。当調査地の南西方向約40mの地点で実施した第4次・第51次調査においては、竪穴式建物跡や溝などが検出されているが、その方位も概ねN50°E前後を示し、第55次調査で検出された溝にも連なるような様相をみせている（第19図）。

それでは、この周辺の遺構の方位が何ゆえ同じ方向性をもって形成されたのであろうか。その根本的な要因は、今述べたように地形的な影響を受けてのものと考えられる。これは、人為的な手が加えられた可能性もあるが、第55次調査では2つの落ち込みの間に挟まれる形で微高地が認められ、微高地に建物跡が検出された。第20図は、これまでの垂水南遺跡包蔵地及び周辺地における発掘調査・試掘調査で確認した土層堆積図から、古墳時代の遺構ベース面と想定される標高（T.P）を当てはめることのできた地点を示したものである。これは、遺跡全域の標高を得た上での図ではなく、限られた範囲のポイントとして示している部分も多いが、建物跡や井戸跡が検出された地点の標高を参考にT.P0.8m以上と、河道跡や湿地的様相が主としてみられるT.P0.7m以下の範囲を大まかに示している。これは、あくまでも参考図としての域を出ないが、第55次調査地点から第4次・第51次調査地点付近にかけての一帯では、北東から南西へのびる形でT.P0.8m以上の範囲が認められる。また、この範囲は、これまで確認されている垂水南遺跡の域内でもっとも標高が高い地点となり、他の地点がT.P1.4m以下となるのに対して、この範囲は、北東端でT.P2.2m、南西端でT.P1.5mとなる。おそらくは、第55次や第4次・第51次で検出された遺構の方位は、低地中における調査地付近の北東から南西方向へのびる微高地の広がり方が影響したものと考えられる。つまり、微高地の方向性に沿う形で区画あるいは排水等の目的で溝などが構築され、それと同時期か前後して建物跡が存在したものと考えられる。

このように、今回の発掘調査では、低湿地的様相をみせる環境下で展開した遺跡が、微高地の分布やその方向性によって遺構等に影響を及ぼすという状況を確認した。これは、低湿地帯における遺跡の特徴の一端を示しているものといえよう。また、参考図ではあるが第20図をみると、微高地といえる地点においても高低の差があり、この第55次調査地付近が垂水南遺跡の中でも最も高い地点となる。こうした微高地の中での高低差が、遺跡の展開に何らかの影響を及ぼしたのかどうかという点も留意しつつ、今後は、垂水南遺跡について考えていく必要がある。



※数値（ゴシック）は古墳時代遺構面の標高（T.P.）を示す。

網かけ部分は概ねT.P.0.8m以上の地点を囲ったもの。

▲は建物跡、黒塗りは河道跡を検出した地点を示す。

第20図 垂水南遺跡古墳時代遺構面標高図（1：4,000）

遺物観察表

遺物 番号	原番号	層位・遺跡	種類	法丈 (cm)	形態・調査	色 聞	残存率	備考
1	126-2	落ち込み1	土師器 壺	口径 13.5 基高 12.3 (残存高)	口縁部: 横ナデ 体部外側: ハケ調整 体部内面: ケズリ (上位部は指サ サ工後ナデ)	外面: 黄灰 10YR6/2・にぶい黄橙 10YR7/2 内面: にぶい黄橙 10YR7/2・灰白 10YR6/2 断面: にぶい黄橙 10YR7/2	上位部 の 3/4	
2	131-1	落ち込み1	土師器 壺	口径 13.5 基高 14.8 (残存高)	口縁部～体部外側: ハケ調整 (口 縁部一部ナデ) 体部内面: ケズリ後ナデ	外面: 灰白 10YR7/1・淡 赤橙 2.5YR7/3 内面: 灰白 10YR7/1 断面: 灰白 10YR7/1	上位部 の 2/3	1 ~ 3mm程 度の砂粒多 く含む
3	132-2	落ち込み1	土師器 壺	口径 14.2 (復元) 基高 7.3 (残存高)	口縁部: 横ナデ 体部外側: 板ナデ 体部内面: ナデ	外面: 黄灰 10YR4/1・にぶい黄橙 10YR7/2 内面: 黄灰褐 10YR6/2 断面: にぶい黄橙 10YR7/2	上位部 の 1/2	
4	20 (127・ 128)	落ち込み1	土師器 壺	口径 15.8 (復元) 基高 9.3 (残存高)	口縁部外側: 板ナデ後横ナデ 口縁部内面: 横ナデ 体部外側: 板ナデ後ナデ 体部内面: ハラケズリ	外面: にぶい黄橙 10YR7/2 内面: にぶい黄橙 10YR7/2 断面: にぶい黄橙 10YR7/2 (内外面削) ・褐灰 5YR8/1 (中央部)	上位部 の 1/3	
5	131-4	落ち込み1	土師器 壺	口径 11.2 (復元) 基高 9.5 (残存高)	口縁部: 横ナデ 体部外側: ハケ調整後ナデ 体部内面: ケズリ・ナデ	外面: 灰 5Y4/1・灰白 5Y8/1 内面: 灰 5Y4/1 (口縁部)・灰白 5Y7/1 (体部) 断面: 灰白 10YR6/1・灰 2.5Y5/1 (中央 部)	上位部 の 3/4	
6	90	落ち込み1	土師器 壺	口径 16.1 (復元) 基高 6.3 (残存高)	口縁部外側～内面上半: ハケ調整 後横ナデ 口縁部内面下半: ハケ調整後ナデ	外面: にぶい黄橙 10YR7/2 (一部褐灰 10YR5/1) 内面: にぶい黄橙 10YR7/2 (一部褐灰 10YR4/1) 断面: 灰白 10YR6/2 (内外面削)・褐灰 10YR5/1 (中央部)	口縫部のみ 残存	
7	14	落ち込み1	土師器 壺	口径 19.1 (復元) 基高 12.5 (残存高)	口縁部外側: ハラミガキ 口縁部内面: ナデ (上部にハケメ 残る) 体部外側: ナデ 体部内面: ハラケズリ 外帶部: 横ナデ	外面: にぶい黄橙 10YR7/3 内面: にぶい黄橙 10YR7/2 断面: 黄灰 2.5Y4/1	口縫部・体部 上位の 1/5	
8	14 (20・ 128)	落ち込み1	土師器 壺	口径 12.6 基高 11.8 (残存高)	口縁部外側: ハラミガキ (上位は 横ナデ) 口縁部内面: 横ナデ 体部外側: ナデ	外面: 黄灰褐 10YR6/2・明黄褐 10YR7/6 ・黑 10YR2/1 内面: 明黄褐 10YR7/6・褐灰 10YR4/1 断面: 明黄褐 10YR7/6	1/4	
9	131-2	落ち込み1	土師器 壺	口径 12.2 基高 14.7	口縁部外側: 横ナデ 口縁部内面: ハケ調整後ナデ 体部外側: ハケ調整後ナデ 体部内面: ナデ	外面: 黄灰 10YR6/1・灰白 10YR7/1 (一 部墨 2/0) 内面: にぶい黄橙 10YR7/2 断面: 黄灰 10YR6/1・灰白 10YR7/1	ほぼ完存	
10	126-1	落ち込み1	土師器 壺	口径 11.8 (復元) 基高 12.8 (残存高)	口縁部: 横ナデ 体部外側: ハケ調整 体部内面: ケズリ	外面: にぶい黄橙 10YR7/2 内面: 明褐灰 5YR7/2 断面: にぶい黄 7.5YR8/4	上位部 の 1/2	
11	213	落ち込み1	土師器 壺	口径 9.2 基高 12.1	口縁部: 横ナデ 体部外側: 板ナデ 体部内面: 指サエ・ナデ	外面: 灰白 10YR7/1・褐 10YR1.7/1 内面: にぶい黄橙 10YR7/2	完存	
12	15-1	落ち込み1	土師器 壺	口径 9.6 (復元) 基高 10.3 (残存高)	口縁部外側: ハケ調整後横ナデ 口縁部内面: 横ナデ 体部外側: ハケ調整・ナデ 体部内面: ハラケズリ・ナデ	外面: 灰白 10YR8/2 内面: 淡黄 5YR8/3 (口縁部)・褐灰 10YR8/1 (体部) 断面: 淡黄褐 5.5YR8/3	1/3	
13	128-1	落ち込み1	土師器 小型丸底壺	口径 7.7 基高 10.0	口縁部: 横ナデ 体部外側: ハケ調整 (上位は横ナ デ) 体部内面: ナデ	外面: 黄灰 2.5Y5/1・灰黄 2.5Y7/2 内面: にぶい黄橙 10YR7/2 断面: 淡黄 5.5YR8/3	ほぼ完存	
14	214	落ち込み1	土師器 小型丸底壺	口径 8.4 基高 10.1	口縁部: 横ナデ 体部外側: ハケ調整 体部内面: ケズリ	外面: 黄灰 10YR4/1・灰白 10YR7/1・に ぶい黄橙 10YR7/2 内面: にぶい黄橙 10YR7/3 断面: 淡黄 5.5YR8/3	ほぼ完存	構成後に意 図的に穿孔 か?
15	132-1	落ち込み1	土師器 小型丸底壺	口径 7.4~8.0 基高 8.5	口縁部: 横ナデ 体部外側: ハケ調整後ナデ 体部内面: ケズリ	外面: 黄灰 10YR4/1・灰白 10YR7/1・に ぶい黄橙 10YR7/2 内面: にぶい黄橙 10YR7/3 断面: にぶい黄橙 10YR7/2	ほぼ完存 (口縁部が 一部欠損)	
16	131-3	落ち込み1	土師器 小型丸底壺	口径 8.6 基高 8.8	口縁部: 横ナデ 体部外側: ハケ調整後ナデ 体部内面: ケズリ	外面: 褐灰 5YR8/1・にぶい黄橙 10YR7/3 ・淡黄褐 10YR7/3 内面: にぶい黄 5.5YR7/3 (口縁部) ・灰黄褐 10YR8/2 (口縫部の一部と体部) 断面: 褐 5YR8/6・淡黄 5YR8/3	口縫部が 1/2欠損	

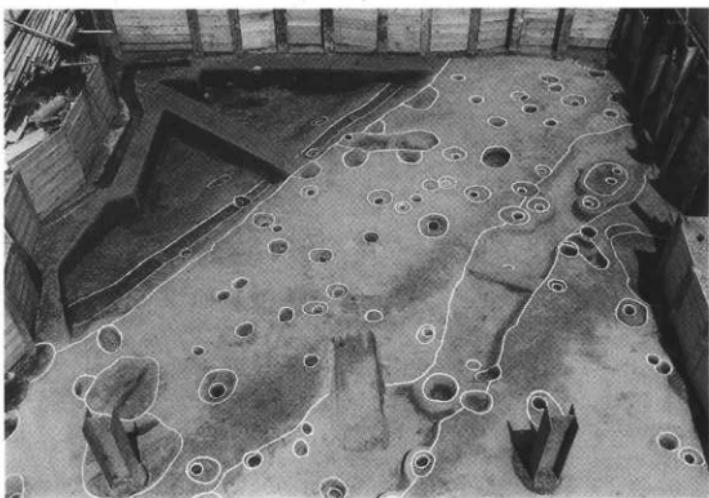
遺物番号	原番号	層位・遺構	種類	法量(cm)	形態・調整	色調	残存率	備考
17	20-1	落ち込み1	土器器 小型丸底盤	口径 6.8 (復元) 器高 7.3 (残存高)	口縁部：横ナデ 体部外面：板ナデ・ナデ 体部内面：指オサエ・ナデ	外面：にぶい黄緑 10YR7/2 内面：にぶい黄緑 10YR7/2 断面：灰白 10Y8/1(外側)・褐灰 10Y5/1(内側)	1/3	
18	128-2	落ち込み1	土器器 小型丸底盤	器高 7.2 (残存高)	体部外面：ハケ調整後ナデ 体部内面：ナデ	外面：灰白 2.5Y6/2 内面：灰白 2.5Y5/2 断面：反白 2.5Y6/2(内外両側)・灰 M6/0(中央部)	体部のみ 残存	
19	15-2	落ち込み1	土器器 小型丸底盤	口径 9.5 (復元) 器高 7.1 (残存高)	口縁部：横ナデ 体部外面：ハケ調整 (上部は横ナデ) 体部内面：ケズリ	外・内・断面：灰白 10YR7/1	1/3	
20	91-1	落ち込み1	土器器 鉢	口径 12.0 (復元) 器高 6.5	口縁部：横ナデ 体部外面：ナデ (底部付近はハケ調整) 体部内面：ナデ	外面：黄灰 2.5Y5/1・灰黄 2.5Y7/2・黒褐色 2.5Y3/1 内面：黄灰 2.5Y5/1・黄灰 2.5Y4/1 断面：灰黄 2.5Y7/2	1/2	
21	15-3	落ち込み1	土器器 鉢	口径 15.7 (復元) 器高 6.1 (残存高)	口縁部：横ナデ 体部外面：ハケ調整 体部内面：板ナデ・ナデ	外面：にぶい黄緑 10YR7/3 (一部黒褐 10Y8/1) 内面：にぶい黄緑 10YR7/3 断面：にぶい黄緑 10YR7/3	1/3	
22	91-2	落ち込み1	土器器 (土玉)	直径 4.3 器高 4.2	ナデ	外面：灰黄 2.5Y6/2 (一部黒褐 2.5Y3/1)	完存	
23	14 (19)	落ち込み1	土器器 高杯	口径 17.3 (復元) 器高 11.6 (残存高)	口縁部：横ナデ 体部内面：ナデ 体部外面：ハラナデ 体部内面：絞り底	外・内・断面：にぶい黄緑 10YR7/2	杯部の1/3と 脚部欠損	
24	128 (132)	落ち込み1	土器器 高杯	口径 20.4 器高 7.0 (残存高)	口縁部端面～外上部：横ナデ 口縁部下部：ハケ調整 体部内面：ハケ調整後ナデ 底部内面：ハケ調整後ナデ 底部外面：ハケ調整後へラ形状のもの でナデ	外面：褐灰 10YR4/1・灰黄褐 10YR6/2 内面：褐灰 10YR4/1・灰黄褐 10YR6/2 断面：にぶい黄緑 10YR7/3・にぶい褐 7.5YR6/4	杯部のみ残 存 (口縁部の 1/2欠損)	
25	132-3	落ち込み1	土器器 高杯	口径 18.3 器高 7.1 (残存高)	口縁部：横ナデ 底部内面：ハケ調整後ナデ 底部外面：指オサエ後ナデ	外面：にぶい黄緑 10YR7/2・にぶい褐 5YR7/4 内面：褐灰 7.5YR7/2・灰赤褐 2.5YR7/4 (底部黒褐 7.5YR3/1) 断面：褐灰 7.5YR7/2・にぶい黄緑 10YR7/2・灰 M6/0	杯部のみ残 存 (口縁部の 1/3欠損)	
26	131 (132)	落ち込み1	土器器 高杯	口径 19.2 (復元) 器高 5.5 (残存高)	口縁部：横ナデ 底部内外面：ナデ	外面：灰褐 7.5YR6/2・浅黄褐 7.5YR8/6 ・真 7.5YR1.7/1 内面：灰褐 7.5YR6/2・浅黄褐 7.5YR8/6 ・真 7.5YR1.7/1 断面：にぶい黄緑 7.5YR7/4 (内外両面) ・褐灰 7.5YR4/1 (中央部)	杯部のみ残 存 (口縁部の 1/4欠損)	
27	132-4	落ち込み1	土器器 高杯	口径 17.8 (復元) 器高 5.1 (残存高)	口縁部：横ナデ 底部内面：ナデ 底部外面：ナデ (一部へラ形状のもの の底部分が埋る) 底部内面：ナデ	外面：灰黄褐 10YR6/2 内面：にぶい黄緑 10YR7/2・にぶい黄緑 10YR4/3 断面：にぶい褐 5YR6/3 (中央部の一部 の底部分が埋る) 5YR5/1	杯部のみ残 存 (口縁部の 1/3欠損)	
28	20-2	落ち込み1	土器器 高杯	口径 15.6 器高 4.9 (残存高)	口縁部：横ナデ 底部内外面：ナデ	外・内面：にぶい黄緑 10YR7/2・灰黄 2.5Y5/1 (一部黒 2.5Y2/1) 断面：にぶい黄緑 10YR7/2 (一部灰黄 2.5Y5/1)	杯部のみ残 存 (口縁部の 1/4欠損)	
29	20 (131 - 132)	落ち込み1	土器器 高杯	口径 20.0 器高 6.7 (残存高)	口縁部内面：横ナデ (一部指オサエ) 底部内面：ナデ 底部外面：指オサエ後ナデ	外面：灰白 10YR8/1 (一部黒 2.5Y2/1) 内面：灰黄 2.5Y7/2 断面：灰白 10YR8/1	杯部のみ残 存 (口縁部の 一部欠損)	
30	15 (21-22)	落ち込み1	土器器 高杯	口径 16.4 器高 11.9	杯口縁部：横ナデ 杯底部内面：ナデ 杯底部外面：ハラナデ 脚柱状脚部内面：ハラナデ 脚柱状脚部外面：絞り底 脚部外面：ナデ 脚部内面：布目底	外・内面：灰黄 2.5Y5/1・淡黄 2.5Y8/3 断面：灰白 2.5Y7/1	杯部の1/3と 脚部の1/3 欠損	
31	130 (131)	落ち込み1	土器器 高杯	口径 16.4 器高 11.4	杯部内面：ナデ (口縁縫隙部は横ナデ) 外面は厚底のため不明確) 脚柱状脚部内面：ハラナデ 脚柱状脚部外面：絞り底 脚部外面：ナデ 脚部内面：布目底	外面：浅黄褐 7.5YR8/3 (杯部)・灰白 7.5YR8/2 (脚部) 内面：灰白 7.5YR8/2 (杯部)・灰白 7.5YR8/1 (脚部) 断面：灰白 7.5YR8/1~8/2 (一部褐灰 7.5YR4/1)	杯部の2/3 欠損	2方向の 透孔

登録 番号	原番号	部位・連携	種類	法量 (cm)	形態・調整	色 調	残存率	備考
32	20-3	落ち込み1	土師器 高杯	口径 15.5 (復元) 器高 12.5	杯口端部: 横ナデ 杯底部外面: ハケ調整後ナデ 脚柱状部外面: ハケ調整後ナデ 脚柱状部内面: ヘラ状のものによる方向のナデ 脚部外面: ハケ調整後横ナデ 脚部内面: ハケ調整後ナデ	外面: にぶい緑 5YR7/3 (杯部)・に ぶい黄緑 10YR7/3 (脚部) 内面: にぶい黄緑 10YR7/3 (杯部)・暗 2.5YR6/6 (脚部)一部にぶい黄緑 10YR7/3 (脚部) 断面: 暗 5YR7/6・黄緑 2.5YR6/1	杯部の 1/3 欠損	
33	15 (132)	落ち込み1	土師器 高杯	口径 17.8 (復元) 器高 5.5 (残存高)	口端部: 横ナデ 底部内面: ナデ	外・内面: 浅黄緑 10YR8/3 (一部決赤緑) 断面: 淡黄緑 10YR8/3	杯部のみ残 存 (口縁部の 2/3欠損)	
34	132-5	落ち込み1	土師器 高杯	口径 17.0 器高 6.1 (残存高)	口端部: 横ナデ (内面に一部ハケ メタル) 底部外面: 指サエ工後ナデ 底部内面: ナデ	外面: 暗白 10YR8/1・灰白 7.5YR8/2 内面: 暗 2.5YR7/6・明褐色 7.5YR7/1・ にぶい緑 7.5YR7/3 断面: 褐灰 7.5YR8/1	杯部のみ残 存 (口縁部の 1/3欠損)	
35	無番	落ち込み1	石製品 瓦五	長さ 1.7 厚さ 0.2~0.48		褐色 7.5YR5/1	完存	
36	131-5	落ち込み1	石製品 瓦五	径 0.4 厚さ 0.3		暗オリーブ灰 2.5GY4/1	完存	
37	145	落ち込み2	復原器 片蓋	口径 14.7 (復元) 器高 3.6 (残存高)	口端部: 四回ナデ 天井部外面: 回旋ヘラケズリ 天井部内面: ナデ	外面: 灰白 9/0 内面: 灰 9/0 断面: 灰白 9/0	1/3	
38	146-1	落ち込み2	土師器 壺	口径 15.5 (復元) 器高 9.0 (残存高)	口端部: ハケ調整 (壺部・外面にハケ 調整後ナデ) 体部外面: ハケ調整 体部内面: ケズリ	外面: 暗灰 10YR4/1・にぶい黄緑 10YR7/3 内面: 暗灰 10YR4/1・にぶい黄緑 10YR8/3 断面: 褐灰 10YR4/1・褐灰 7.5YR6/1	上位部 の 1/3	
39	174	落ち込み2	土師器 小型丸底壺	口径 10.2 器高 8.0	口縁部外面: 横ナデ 口縁部内面: 板ナデ 体部外面: 板ナデ 体部内面: ケズリ (下部はナデ)	外面: にぶい緑 7.5YR7/3 (一部場反 10YR4/1) 内面: にぶい黄緑 10YR7/3 断面: 灰白 10YR8/2	ほぼ完存	
40	201	落ち込み2	土師器 小型丸底壺	器高 6.7 (残存高)	体部外面: ハケ調整 (上部はナデ) 体部内面: ケズリ後ナデ	外・内面: 灰白 2.5YR6/6・にぶい黄緑 10YR6/3 断面: 灰白 2.5YR6/1~8/2 (内外面側) ・黄灰 2.5YR5/1 (中央側)	体部のみ 残存	
41	147	落ち込み2	土師器 鉢	口径 26.8 (復元) 器高 11.7 (残存高)	口端部: 横ナデ 体部外面: ハケ調整 (上部はハケ 調整後横ナデ) 体部内面: ナデ	外面: にぶい黄緑 10YR7/2 (一部深緑 7.5YR7/4) 断面: 暗白 10YR8/1	1/4	
42	178	落ち込み2	土師器 高杯	口径 20.8 器高 7.6 (残存高)	杯部外面: ミガキ	外面: 褐灰 10YR8/1・にぶい黄緑 10YR7/2 ・にぶい黄緑 10YR7/4 断面: にぶい黄緑 10YR7/2	杯部のみ残 存 (1/2)	
43	146-2	落ち込み2	土師器 高杯	口径 19.6 (復元) 器高 5.9 (残存高)	口端部: 横ナデ 底部外面: ハケ調整後ナデ 底部内面: ナデ	外面: 黄灰 2.5YR6/2~7/2 内面: 黄灰 2.5YR6/1 断面: 黄白 2.5YR7/1 (外側)・黄灰 2.5YR4/1 (内側)	杯部のみ残 存 (口縁部の 1/2欠損)	
44	87-2	SK 1	土師器 高杯	口径 19.2 器高 4.9 (残存高)	口端部: 横ナデ 杯部内面: ハケ調整後ナデ 底部内面: ナデ	外面: にぶい黄緑 10YR7/4 内面: にぶい黄緑 10YR8/4・淡黄緑 10YR8/3 (口縁部) 断面: 灰白 10YR8/2	杯部のみ残 存 (口縁部 部欠損)	
45	87-1	SK 1	土師器 高杯	口径 18.2 器高 6.3 (残存高)	口縫端部: 横ナデ 杯部内面: ハケ調整後ナデ 杯部内面: 板ナデ (底部はナデ)	外面: 灰白 10YR7/1~8/1 内面: 灰白 10YR8/2・褐灰 10YR5/1 (体 部) 断面: 褐灰 10YR6/1 (外側)・にぶい黄 緑 10YR7/4・灰白 10YR2/2 (内側)	杯部のみ残 存 (口縁部 部欠損)	
46	92	SK 4	土師器 壺	口径 16.4 (復元) 器高 12.8 (残存高)	口端部: 横ナデ 体部外面: ハケ調整 体部内面: ケズリ	外面: 黄灰 2.5YR6/1・灰黄 2.5YR7/2・黑 褐色 2.5YR3/1 (口縁部) 内面: 黑褐色 10YR3/1 断面: 灰白 2.5YR7/1	上位部 の 1/5	
47	179	SK 5	土師器 壺	口径 16.8 (復元) 器高 10.2 (残存高)	口端部: 横ナデ 体部外面: ハケ調整 (上部はナデ) 体部内面: ケズリ	外面: 暗灰 10YR4/1・にぶい黄緑 10YR8/3 (一部黒褐色 10YR3/1) 内面: にぶい黄緑 10YR7/2 断面: にぶい黄緑 10YR7/3	上位部 の 1/3	
48	187	SK 5	土師器 鉢	口径 23.0 (復元) 器高 7.7 (残存高)	口端部: 横ナデ (壺部外面に指サ エの痕跡残)	外面: 明黄色 10YR7/6・灰白 10YR8/2 内面: にぶい黄緑 10YR7/2	口縁部のみ 残存 (1/6)	
49	152	SK 5	土師器 鉢	口径 10.0 (復元) 器高 6.9 (残存高)	内外面: 板ナデ (底部附近は指サ エ)	外面: 灰白 2.5YR6/1 (一部黒褐色 7.5YR1.7/1) 内面: 灰白 2.5YR7/1~8/2 断面: 灰白 2.5YR8/1	1/3	
50	182	SK 5	土師器 高杯	口径 16.6 (復元) 器高 5.4 (残存高)	口縫部外面: 横ナデ 杯部内面: ハケ調整 底部内面: ナデ	外面: 褐灰 7.5YR6/1・淡黄緑 7.5YR8/3 内面: 褐灰 7.5YR8/4 断面: 淡黄緑 7.5YR8/3	杯部のみ 残存 (1/2)	

遺物 番号	原番号	層位・遺構	種類	法量 (cm)	形態・調査	色 調	残存率	備考
51	102-1	S D 1	弥生土器 壺	口径 17.4 (復元) 器高 14.9 (残存高)	口縁部：横ナデ 体部外面：タタキ 体部内面：ナデ	外面：灰白 10YR8/2 (一部黒 10YR1.7/1) 内面：淡黄褐 10YR8/3 (口縁部) - 黒褐 10YR3/1 (体部) 断面：褐色 10YR8/1 - 灰白 10YR8/2	上位部 の2/3	
52	100	S D 1	弥生土器 壺	器高 9.3 (残存高)	体部外面：タタキ (底部付近は指 オサエ・ナデ)	外面：褐反 10YR8/1 内面：にぶい黄褐 10YR7/2 断面：褐反 10YR8/1	下位部 の1/3	
53	102-2	S D 1	弥生土器 壺	器高 11.5 (残存高)	体部外面：タタキ 体部内面：横ナデ	外面：にぶい黄褐 10YR7/3 - 黒褐 10YR3/1 内面：灰黄褐 10YR5/2 断面：にぶい黄褐 10YR6/3	下位部 の1/2	
54	17	S D 1	土師器 高杯	口径 16.4 (復元) 器高 5.3 (残存高)	口縁部：横ナデ 底部内外面：ナデ	外：内面：灰白 2.5YR8/2 断面：にぶい黄褐 7.SYR7/4 - 灰白 10YR8/1	杯部の1/3	
55	84	S D 3	弥生土器 壺	口径 15.0 (復元) 器高 8.3 (残存高)	口縁部：横ナデ 体部外面：タタキ 体部内面：ナデ	外面：にぶい黄褐 10YR7/3 (口縁部の一 部黒褐 10YR3/1) 内面：淡黄褐 10YR8/3 断面：明赤褐 SYR5/6	上位部 の1/3	
56	85	S D 4	弥生土器 壺	器高 4.1 (残存高)	体部外面：タタキ 体部内面：横ナデ	外観：淡黄褐 2.5Y7/6 (一部黒灰 2.5Y5/1) 内面：灰白 2.5Y8/2 (一部黒灰 2.5Y5/1) 断面：棕 7.5Y8/6	底部のみ 残存	
57	196	S D 6	土師器 壺	口径 20.8 器高 8.3 (残存高)	口縁部外面：波状狀 口縁部内面：ナデ 底部内外面：横ナデ	外面：灰黄 2.5Y7/2 - 波穂 5YR8/3 - 灰白 10YR8/2 - 黒 10YR1.7/1 内面：淡褐 5YR8/3 - 黒褐 10YR6/1 - に ぶい黄褐 10YR7/2 断面：褐反 10YR5/1 - にぶい黄褐 10YR7/2	口縁部のみ 残存 (口縁部の一部欠 損)	
58	197	S D 6	土師器 壺	口径 11.2 器高 14.1	口縁部：横ナデ 体部外面：タタキ後へラミガキ 体部内面：ナデ	外面：にぶい黄褐 10YR7/2 - 淡黄褐 10YR8/2 - 黒 10YR1.7/1 内面：灰黄褐 10YR5/2 断面：にぶい黄褐 10YR7/2	ほぼ完存	
59	195	S D 6	弥生土器 鉢	口径 8.4 (復元) 器高 7.5	口縁部：ナデ 体部外面：タタキ 体部内面：横ナデ	外面：黄灰 2.5Y4/1 - 灰白 2.5Y6/2 内面：黄灰 2.5Y4/1 - 淡灰 2.5Y7/3 断面：黄灰 2.5Y4/1 - 灰白 2.5Y6/2	1/2	
60	207	S D 6	土師器 高杯	口径 21.8 器高 7.2 (残存高)	口縁部：底廻のため不明 杯底部内面：ナデ	外観：波穂 5YR8/4 - 棕 5YR7/6 (一部褐 灰 SYR5/1) 内面：淡黄褐 7.SYR8/3 - 黒褐 7.SYR3/1 断面：波穂 5YR8/4	杯部のみ残 存 (口縁部の 1/3欠損)	
61	9	遺物包含物	土師器 台付鉢	口径 12.5 器高 6.7	鉢部内外面：ヘラミガキ 台部：ナデ	外面：にぶい黄褐 10YR7/2～7/3 内面：灰白 10YR8/1～にぶい黄褐 10YR7/2～7/3 断面：灰白 10YR8/1	3/4	
62	133	接着	製造土器	底径 3.5 器高 4.3 (残存高)	外面：指オサエ 内面：指オサエ (体部は底廻のた め不明)	外・内・断面：灰白 2.5Y8/1～8/2	底部のみ 残存	

注) 色調は小山正志・竹原秀雄『新版標準土色帖』(1987) によった。

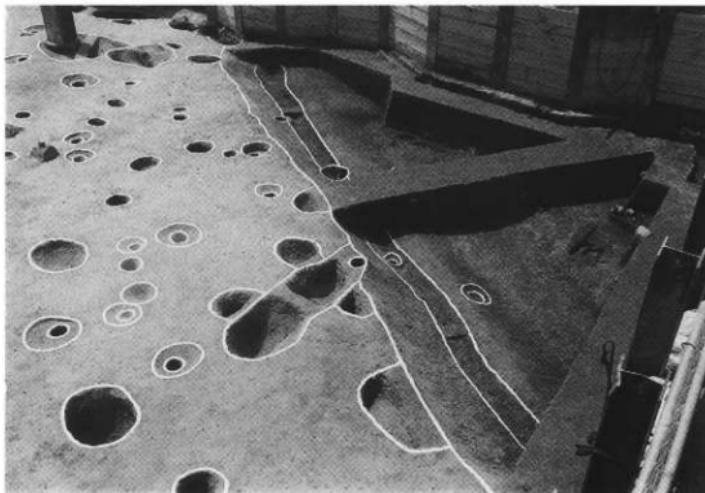
図版1 遺構①



調査区北半(南から)



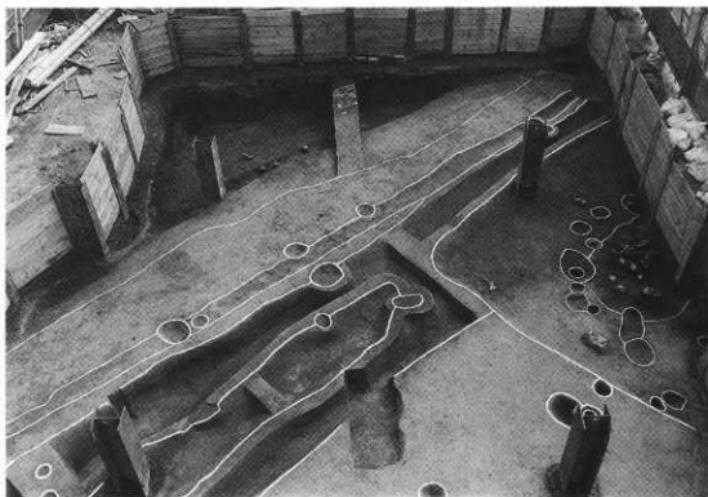
調査区北半(北東から)



落ち込み 1 付近(東から)



落ち込み 1 内勾玉出土状況

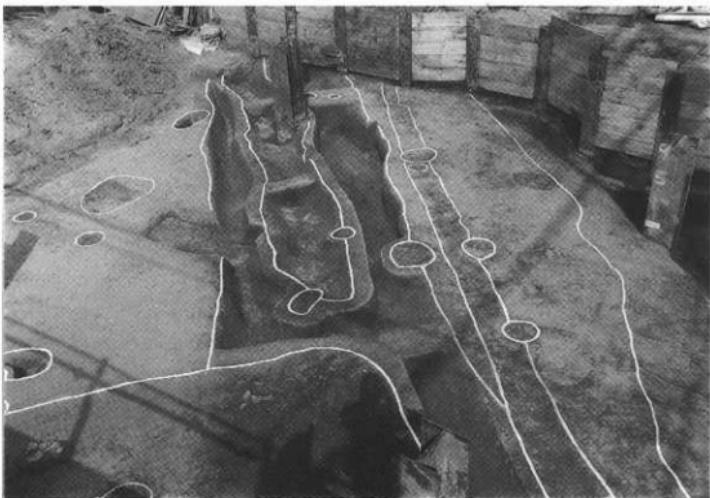


調査地南半(北から)



落ち込み 2(東から)

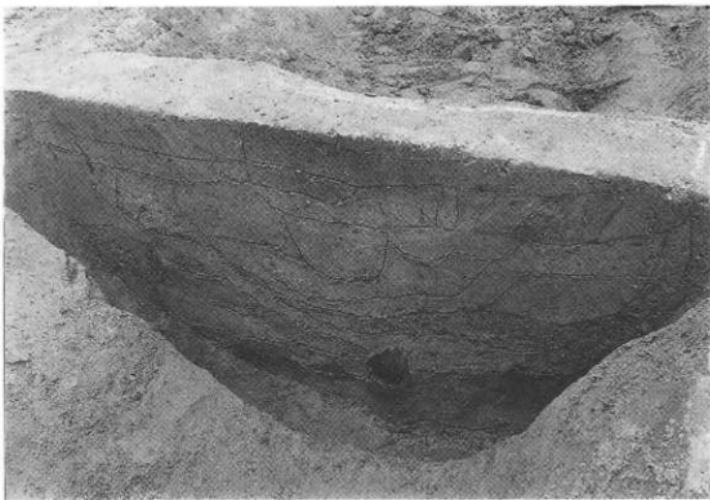
図版4 遺構④



SD 5・SD 6・SD 7付近(南西から)



SD 5・SD 6・SD 7付近(北東から)

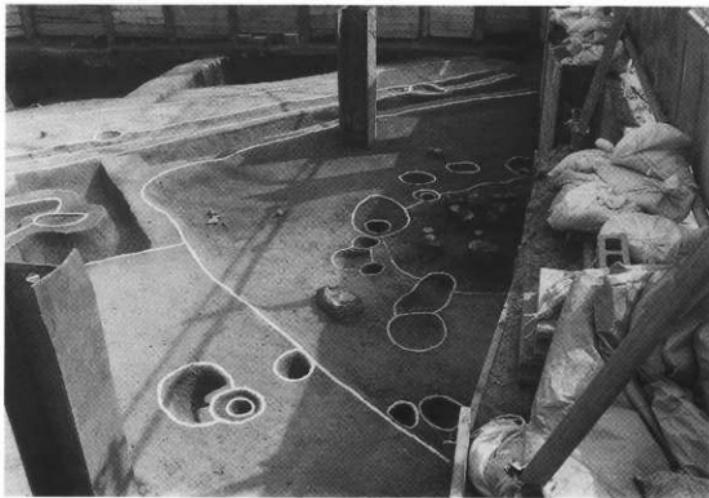


SD 6 埋土堆積状況

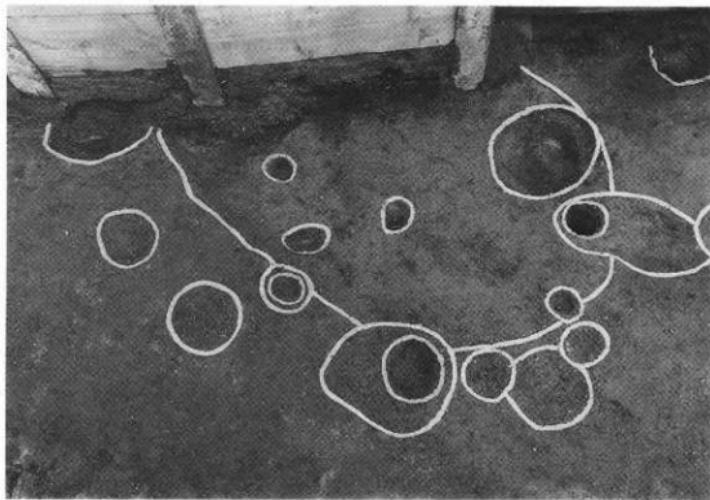


SD 6 内土器出土状況

図版
6
遺構⑥

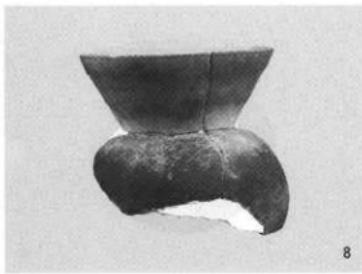
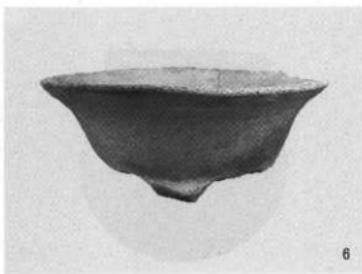
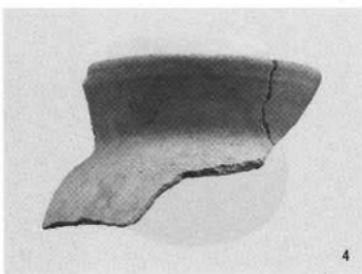
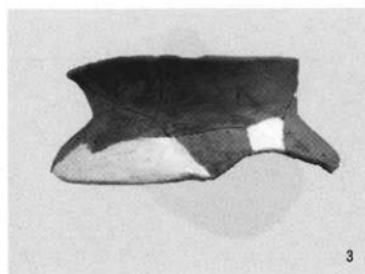


SK 5付近(北から)



SK 6付近(SK 5内、東から)

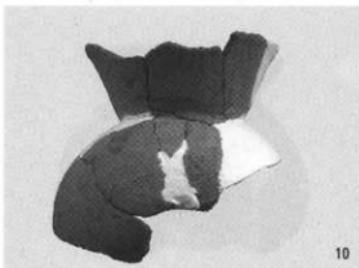
図版7 遺物①



図版 8
遺物②



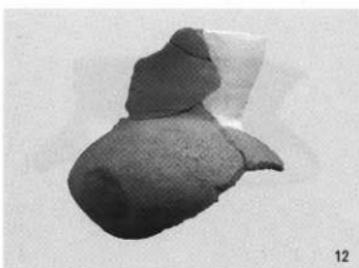
9



10



11



12



13



14

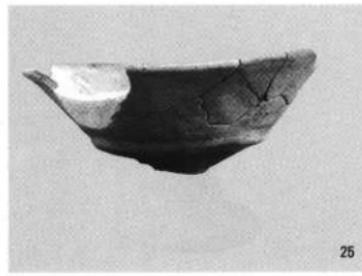
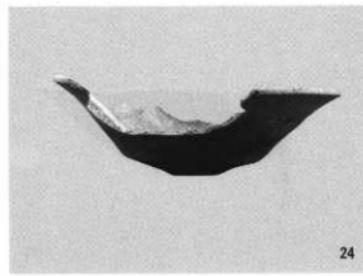
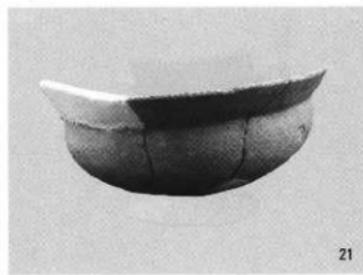
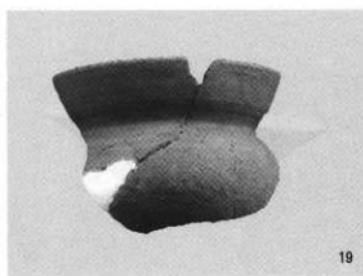


15

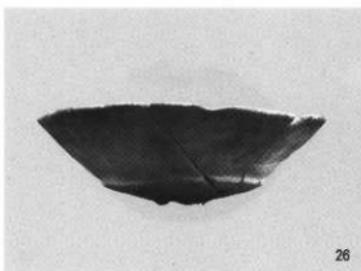


16

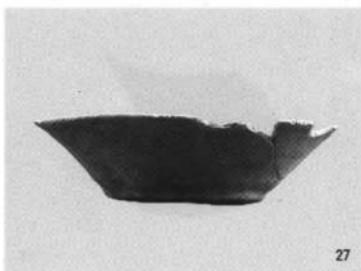
図版 9 遺物③



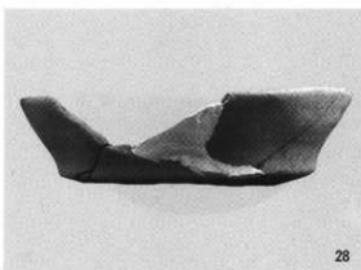
図版 10
遺物④



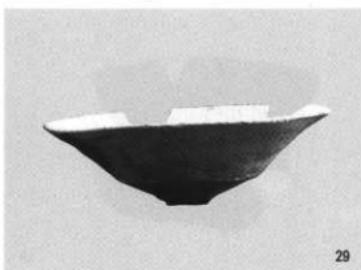
26



27



28



29



30



31



32

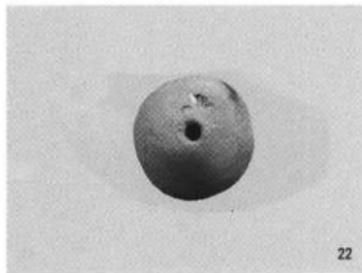


33

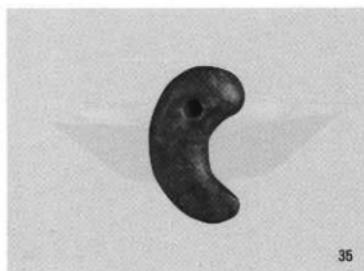
図版 11
遺物⑤



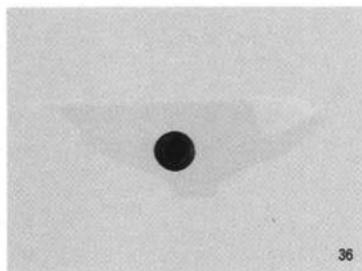
34



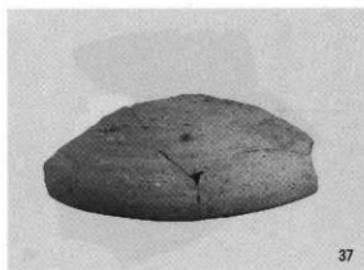
22



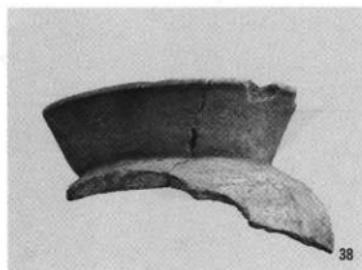
35



36



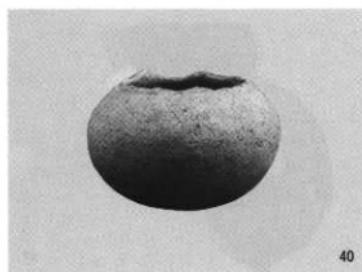
37



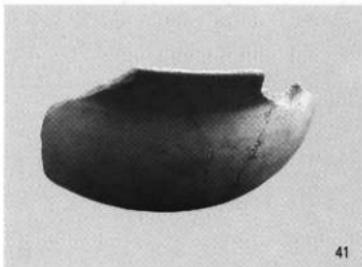
38



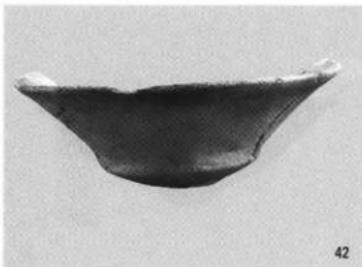
39



40



41



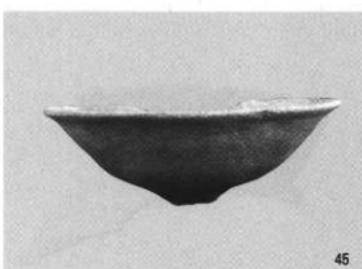
42



43



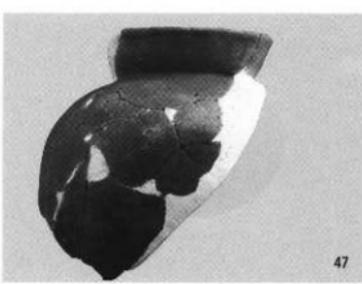
44



45



46

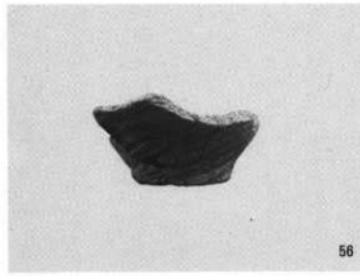
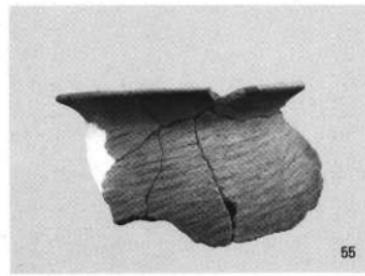
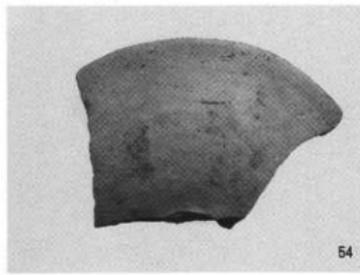
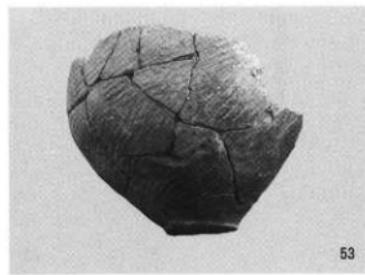
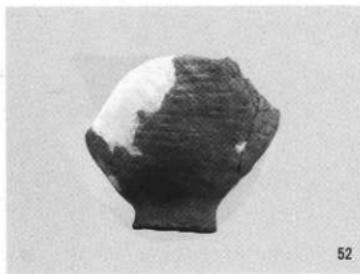
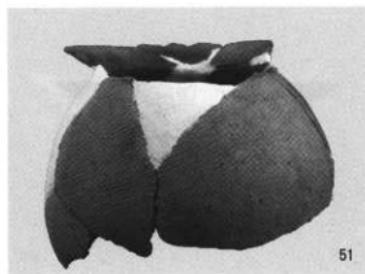
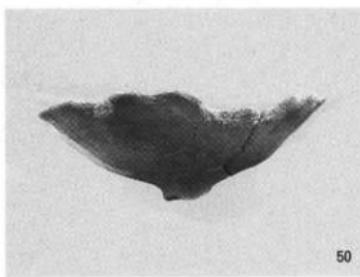
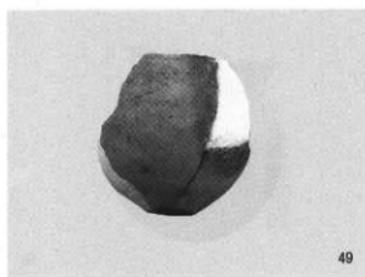


47

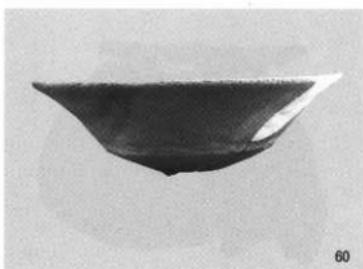
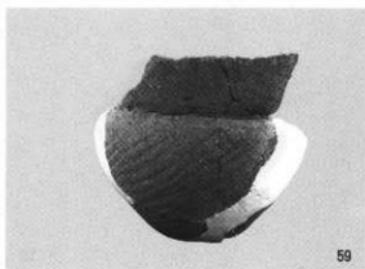


48

図版
13
遺物⑦



図版
14
遺物(8)



垂水南遺跡発掘調査報告書 I

— 垂水南遺跡第55次発掘調査 —

平成20(2008)年3月31日

編集 吹田市泉町1丁目3番40号

発行 吹田市教育委員会

この報告書は500部作成し、一部当たりの単価は630円です。